

地域自治の拠点としての図書館の役割

株式会社マナビノタネ 代表取締役 森田 秀之

1 はじめに

20年以上、図書館やミュージアムなど公共施設づくりのお手伝いをしてきた。1施設2、3年から数年に及ぶため、関わった施設は10件程度だが、どの施設も多くの利用者に愛されているようで、本当に有難い。

特に、武蔵野プレイストと、都城市立図書館の2館に関しては、利用者ばかりでなく、専門家からも評価をいただき、どのような考えでつくられたのかと聞かれることが多い。しかし、両施設とも、多くの方との膨大な検討、コラボレーションの結晶だ。本論考では、私の感じてきたことをお話することをご承知いただきたい。そして私自身、何か専門領域をもっているということではなく、さまざまなプロジェクト経験を活かして取り組んできた。私の考え、行動も過去の記憶に導かれているため、領域の異なる記憶も一緒に語ることをお許しいただきたい。

2 史上最大級の転換期が来ている

私は東京以外で暮らしたことがなかった。2007年40歳の夏、ひとから見れば突然に、会社を辞め、家族で信州に移住した。「都会が嫌になったから？」とか、「田舎暮らしにあこがれて？」とよく聞かれるが、そうでもない。ある仕事を通して知ってしまったことがあり、居ても立っても居られなくなってしまったのだ。仕事とは愛知万博、愛・地球博とも呼ばれたEXPO 2005日本政府館のネット上パビリオン、

サイバー日本館のディレクターだ。博覧会の共通テーマである地球環境問題の全体像やトピック、事例をまずは知ろうと、編集者やライターとともに気象や環境の専門家、有識者と呼ばれるひとたちへのインタビューを始めた。それが、あまりにも衝撃的な内容ばかりだった。

「地球は随分前に地獄の門をくぐっている」。もう後戻りはできない。「たとえ大昔の生活に戻したとしても百年は灼熱地獄」。アクセルを弱めてもスピードがついた温暖化は止まらない。「毎年未曾有の台風が来る」。集中豪雨も含めて年々激しくなっていくという。当時はぴんと来なかったが、実際にその通りになってきた。まだまだこんなものではないらしい。そして、「やがて地球規模で食糧難になる」。恐ろしいことにどの専門家も同じような話をした。このままでいいのか、家族が生きていけ、そして多くの人びとが上手に乗り越えて生きていくための方法をいまずぐ探り始めないと手遅れになるのではないのか。万博閉幕後もどんどんそういう思いが強くなっていった。こうして食料を作る田畑と、二酸化炭素が循環する薪が確保できる山林がある軽井沢の隣町、長野県御代田町



森田 秀之

もりた ひでゆき

1991年株式会社三菱総合研究所入社。2007年同社退職、マナビノタネ設立。地域資源に尊敬の念を持ち、それらを守り、ひとりひとりが文化的で楽しく個性豊かに暮らしていくためのさまざまな場づくりを行う。せんだいメディアテーク、島根県古代出雲歴史博物館、武蔵野プレイスト、都城市立図書館などの開館に携わってきた。

に移住を決めた。当面は東京に新幹線通勤しながら週末に活動して、時期が来たら独立しようと考えていた。それが勢いが付きすぎて会社を辞めてしまった。幸い、施設開館支援の仕事の依頼をまた頂いた。3年目には里山暮らしの師匠を紹介してもらい、念願の米作りを始めた。すごく面白かった。いや、大事な《何か》がずしんと来た。これを多くのひとに伝えたい。年数回の主要農事に合わせて通ってくる仕組みを考え、翌年から「通い稲作塾」を始めた。



写真1 通い稲作塾での稲刈りの様子

もともと低農薬有機栽培だった田んぼも無農薬に切り替えた。農作業に参加すると、慣行栽培の3倍はする無農薬米をほぼ同じ値段でお分けする。シーズンには田んぼの脇に品川や横浜ナンバーなどの車が並び、駅からはジャンボタクシーが着く。面白い田んぼ、美味しい米、里山の人、同じ価値観で集まる人に会うために来る。これまで米作りに参加した人は150名ぐらいになっていると思う。ヒエやオモダカなどの田の草を手で取る。無農薬がどれほど大変なのかを知る。しかし、みんなで手分けをすることでできてしまうことも知る。本来の活力を取り戻した稲は、殺虫剤をまく必要もなく、虫に多少葉っぱを食われても自力で勝っていくことも見る。薬を使わない田んぼには多様な生きものが共生している。子どもたちははしゃぎ、ぺこぺこになって塩にぎりを頬張る。大人たちは田ん

ぼで体を動かし、宴会でいっぱいおしゃべりする。師匠は「限界集落じゃなくて宴会集落だな」と笑う。御代田町も“騒ぎ”に便乗してクラインガルテン（自家菜園と宿泊小屋）をつくり、好評だ。週末の家を建てるとも出てきた。

稲作を始めた2010年に、プロの杣人（木こり）集団が主催する山仕事の講習会に参加した。この時からある方を勝手に師匠と決め、一緒に山仕事をさせてもらってきた。宴会集落の裏山にはコナラを中心とした広葉樹の薪炭林が広がる。樹齢30年ぐらいまでの若木なら切った根株からひこばえと呼ばれる芽が出て、再び大きく育つ。この萌芽更新の力を使って人びとは代々薪炭林を守ってきた。しかし、エネルギー消費で最大の割合を占める暖房は、灯油や電気に替わった。薪炭林が森に戻ってしまう前に、山の持ち主に代わって木を切り、薪をつくる。薪炭林は保たれ、20年後に薪が必要になっても大丈夫だ。仲間が増え、師匠と弟子7名。私がひとりの杣人のフォロワーになったことで、智恵を継承する“活動”になったのだと後から気づいた。



写真2 薪炭林での薪づくりの様子

今年の元旦、朝日新聞1面に興味深い記事が載った。京都大学の広井良典教授らが日立製作所のAI（人工知能）を用いて約2万通りの未来のシナリオを予測したという。AIは、これまでの都市一極集中型を続けた場合、国として

持続困難になるという結果を出した。地方分散型シナリオなら、地方と都市のバランスが取れ、出生率や格差が改善し、幸福度も高い社会への道が広がるという。しかし、そのように軌道修正するためのタイムリミットはあと7~9年。それを過ぎると持続困難シナリオから抜けられない、とAIは判断を出したのだという。

「あと7~9年」は、1960年頃を境に消えていったかつての暮らしを知っているひとと会い、知恵や文化などさまざまなことを引き継ぐ最後のチャンスとも重なる。日本の食料自給率はカロリーベースで4割を切る。飼料の自給率は3割を下回るのをそれを計算にいれればさらに低くなる。「やがて地球規模で食糧難になる」。エネルギー自給率もわずか7~8%程度。地方が元気でないと、都市が危うい。

グローバル化によって「先進国と後進国」という図式がなくなりつつある。500年続いた資本主義社会が最近言われているようにまもなく終わるとしたら日本社会もこのままではいられない。全世界が脱成長モデルへの大きな転換を求められているが、有効なモデルはまだ見つからない。「後進国」に代わって、非正規雇用など「人」に格差を付けて資本主義系システムを続けていこうとする力が社会にねじれを生み、不幸や不安定さを生んでいる。たとえ世界経済がどのように激変しようとも、異常気象がますます激しさを増そうとも、変わらず暮らしていけるようなセーフティネットを張っていくこと。これが真の安心感や幸福感につながっていく。そのためには、各地方、各都市に『地域自治の拠点』が必要だ。ひとりひとりが自立を目指し、困ったことがあれば協力し合い、課題を乗り越えて未来を想像していけるような場だ。

それをどうやってつくっていったらいいかを考えた結果、すでに必要なリソースを持っている公共図書館をベースにした施設だという答えが出た。私のこの危機感が取り越し苦労だった

としても、地域自治の拠点は地域の人びとの安心感、幸福度、地域力の向上になる。

3 武蔵野プレイスは新たな公民館

正式名称「武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス」（東京都。2011年7月開館。駐車場等を除く延床面積8,871平方メートル）は、中央図書館、吉祥寺図書館とともにもともとあった分館、西部図書館を、JR中央線武蔵境駅南口前の農水省食糧倉庫跡地に移転拡充して誕生した。「地域図書館」「市民活動支援」「青少年活動支援」「生涯学習支援」という4つの機能が互いに刺激し合いながら、新たなコミュニケーションと活動が生まれる場だ。市の人口約14.5万人に対して年間200万人近いひとが訪れ、「日本一にぎやかな図書館」などとも言われている。



写真3 武蔵野プレイス

信州に移住してすぐに武蔵野プレイスの開館準備に加わった。基本構想では、「知的創造拠点」（市民ひとりひとりの生活に、新しい出会いや発見の喜びといった知的な学習の機会をもたらす「場」）を目指すと言われていた。しかし、社会における価値観の多様化や情報化が急速に進み、混沌とした社会になってきていた。各個人が自己の責任において、主体的に判断し行動することがますます求められる時代になってい

くと想像できた。そして、生活やしごと、自然環境などさまざまな課題・テーマを地域社会で共有し、人びとの力を集結、課題解決を図ることができる自立した地域の形成が今後ますます重要になると考えた。

このため、知的・学習拠点という考え方は方針として残しつつも、より地域での交流や社会的ネットワークが活性化し、「活動が生まれていく場」をつくることになっていった。最終的なコンセプトは、「“気づき”から始まる『アクションの連鎖』が起こり得る機会と場を提供し、支援していくことを目指す」とした。

本来、図書館はその地域のひとなら“だれでも”（オープン性）、本、席、貸出、リクエスト、相談などの“みんなが”（コモン性）使えるサービスを無償で提供するという「公共性」の二つの原則を備えた奇跡の公共サービスだ。しかし、一般的な図書館は、住民の2、3割程度の利用者に止まる。人びとの声を聴き、これまでの図書館から変えていった。

「普段、本なんか読まない」という声には、1階エントランスフロアは雑誌架とカフェをメインに配置し、本好きでなくても足を踏み入れやすくした。「静かさが息苦しい」「騒ぎ出してしまう子どもを連れていては行けない」には、カフェの話し声やBGMが吹き抜けから上階に広がり、暗騒音（気になる騒音以外の音）となっ



写真4 1Fフロア中央にあるカフェ

てこどもの声も目立たなくしてくれる。

「本屋には行くけど、図書館は配置がわかりにくくて」には、料理・健康・子育てといった日常生活に関わるテーマについて、大型書店の並びを参考にし、つながり合い、偶然の出会いも起こり得る配架プランのテーマライブラリーを2階につくった。地下1、2階は従来の図書館分類法による配架で検索性を保った静寂な環境になっている。文学もここに置かれている。



写真5 2階テーマ架（上）、地階の静寂環境（下）

そして3階には学習室、ミーティングルームとともに、市民活動団体が打ち合わせや印刷などで使うことができる場所がある。団体専用ロッカーや、紹介ファイル、チラシ置き場も設けた。さらに館のウェブサイトで団体がお知らせを発信できるようにした。いま登録団体は300を超える。4階にはセミナールームと空港のラウンジのような有料席がある。



写真6 市民活動団体ファイルコーナー

地下2階には、ティーンズだけが入れる「ティーンズスタジオ」がある。以前より駅前のショッピングセンターのフードコートに中高生が集まっていた。ハンバーガーショップのフライドポテトなどを食べながらおしゃべりする。武蔵野市はこれを見て館内に“青少年の居場所”をつくることにした。しかし、中高生にヒヤリングしてみると、「部活や塾、宿題もあって、本を読む時間がない。行かない。」という。改めてフードコートを見に行くと、たしかに宿題をしている中高生たちが結構いた。「本を読みなさいと言わない。宿題はもちろん、ゲームも、飲食もやっていいとしたら、どう？」と質問をすると「だったら行くかも。」とみんな答えてくれた。



写真7 ティーンズの居場所、スタジオラウンジ

いま、中高生たちでいっぱいだ。おとなの目を気にすることなく自由に、きちんと使っている。ライブラリーエリアでは本も読んでいる。

多くの人びとがここに通ってくる理由は、施設全体に流れている自由な空気なのではないかと思う。規制や禁止はできるだけしない。そのかわり、モラルは穏やかに求め合う。さらに自立的、自発的という雰囲気がある。武蔵野プレイスがオープンした時、図書館というよりも新たな公民館タイプができたと感じた。いや、日本の公共図書館はもともと公民館図書室であったから、新しくはないのかもしれないが。

4 継承を考えたら未来が来る

私の住んでいる長野県は、公民館が総数、人口当たりの数ともに全国で1番多い。日本の約1割の公民館が長野県にある計算だ。もともと信州は、山あいの厳しい自然環境の中で助け合って生きてきた。その気質が住民自治の拠点として公民館を求めてきたのだろう。公民館の始まりは、明治維新の社会の急激な変化による歪みに対応するために実際生活に即した教育や活動をおこなう「民間の場」だと言われている。

公民館全国第2位の山形県、その庄内地方に2010年に呼ばれた。地域によっては9割の農家に継ぎ手がないという。農文化の素晴らしさを知ってもらい、後継者を増やしていくお手伝いを頼まれた。そこで、多くの農家が休みにくる鶴岡の奥座敷、湯田川温泉で、地域の在来野菜や伝統的な食材の素晴らしさを伝える手作りの企画展を定期的におこなうことにした。旅館の若旦那、若女将、農家、やきとり屋の後継ぎが“学芸員”（自らをマナビ人と呼んだ）となった。彼らがまず学び、誰もがわかりやすいような展示をつくる。山形大学農学部先生、学生たち、もちろん農家も開催に協力してくれた。路線バスの待合所が特設ミュージアム会場だ。



写真8 冬でも賑やかな「朝ミュージアム」



写真9 マナビ人が展示の内容を解説する様子

ある日曜、朝市のように朝7時から11時まで、年3、4回のペースで開催される、無料の“朝ミュージアム”に、庄内のひと、宿泊客、農家も来てくれた。取り上げたものは、近くの旧役場建物で朝食として味わえ、系譜の違いなどを食べ比べられるようにした。畑や酒蔵などへの有料ツアーも行なった。この取り組みは新聞などでも紹介され、庄内の食材の素晴らしさも広まった。つくった説明資料は旅館に掲示され、宿泊客には食材の深い話しをする。懇意になった農家から直接食材を仕入れる。農家を継ぐ若者も現れてきた。イベントは3年間で日常化したとして休止した。伝統の継承をどうするか考えたその先に、地域創造があるのだと知った。

5 世界は記憶でできている

2011年、庄内では湯田川温泉でミュージアムをやろうと決め、東京では武蔵野プレイスの開館準備が佳境だった時に、東日本大震災が起こった。大変な状況をテレビ報道で見ながら、自分は食料をつくって送る側になると決めた。行く勇気がなかったのだ。10月、石巻市の半島部、旧雄勝町地区に先に支援に入っていた建築家のヨコミゾマコトさんから「手伝ってほしい」と誘われ、復興まちづくり支援チームに参加することになった。訪れると家屋や店舗は津波で流され、学校や役場、病院なども建物の骨格だけしか残っていなかった。まちづくりのお手伝いに来たというのに、まちがイメージできなかった。ある日、写真愛好家がまちの神社の正月を写したデータがあったというので見せて頂いた。



写真10 被災した雄勝町中心部（建物上にバス）



写真11 かつてまちにあった神社の正月の風景

雄勝の人たちが言っているまちが初めて想像できた。地域は人びとが共通に持つ“集合的記憶”でつくられている。私はハードウェアではなく、記憶の中のまちづくりのお手伝いに専念することにした。漁師や浜のおかあさん、まちに住んでいた人の話を聞き、新聞紙大で「雄勝を巡る物語」をまとめた。続編は企画から取材まで地元の方にも加わって頂いた。みんなが大事にしてきた暮らしや風景、文化が集まった。参加した方から「私やっぱりこの町が好きだとわかりました」と泣きながら言われた。トレーラーハウス3台を使って復興まちづくり情報交流館をつくり、移転地造成工事の状況とともに集合的記憶を展示した。公民館になっていた。



写真12 「雄勝を巡る物語」

まち、地域は記憶でできている。だが、ほとんどの記憶は、本や資料にはなっていない。ましてや、代々ひとによって受け継がれてきた知恵や技は、継ぐ人がいなくなれば一瞬にして消えてしまう。信州、庄内、石巻で感じたことだ。

6 都城市立図書館はまちの居場所

日本の地方都市が抱える中心市街地の空洞化問題。そもそも、「まち」に何があれば人は集まってくるのだろうか。

ひとは山や川、海の近くで自然の恵みを頂いて生きてきた。ものの交換や交流などのために

集まりやすい場所がまちになっていったのだろう。近年、1次産業が集約され、ほとんどの食料やエネルギー、材料、道具などを地域外から得るようになり、多くのひとが里山での暮らしを捨てた。まちは便利に暮らす場所になり、駅を中心にさらに人が集まった。市場、仕事場、繁華街など場づくりが成功したまちは都市になった。そして、大型スーパー、コンビニがまちの外につくられ、店先まで車で行ける。ひとは便利さと安さを尺度にまちの外にも住むようになった。まちの外にある巨大ショッピングモールでまちを再現しているのはなんとも皮肉だ。さらに、インターネットと物流システムによって、店よりも安く、鮮度がいいもの、珍しいものが玄関先まで届けられる時代になった。

より便利なものと少しでも安いものを求める人びとの価値観が変わらない限り、かつてのまちなかに人は戻らないのではないか。すなわち、行かないと味わえない、お金では買えない魅力的な《何か》がない限り、まちに人は戻らない。

宮城県第二の都市、人口約16.5万人の都城市はまちなか活性化のために、時代の波によって閉鎖された中心部にある元ショッピングモール建物を改修し、市民の居場所となる図書館を移転させる計画をつくった。英断だと思った。



写真13 かつてのショッピングモール(上)と改修後

この都城市立図書館（宮崎県都城市。2018年4月開館。併設施設部分を除く延床面積8,046平方メートル）の改修工事へのアドバイス業務と、家具備品調達、開館準備、5年間の図書館とカフェの管理運営を任せられた。何をしたらはできるだけお話したいが、なぜそうしたかを書く紙面が足りない。前述の事例から想像頂くことでお許しいただきたい。

入ると誰もが感じるの「図書館らしくない」ということだろう。「ようこそデスク」というサインの下に案内スタッフがいる。作曲家と組んだ図書館のためのBGMが空気を和らげる。



写真14 見通しのよい図書館エントランス

建物の中心部は大きな吹き抜けのホール空間になっていて、天井のレースからやわらかい自然光が降る。中央は、いつでもトークイベントなど催しができるように空間を空けてある。みんな自然に挨拶したり、会話をしている。



写真15 ホール(時計塔左に幅6mのショーケース)

かつての「店舗」部分には開架14万冊のうちの大部分が収まる7段の書架が整然と並ぶ。この高書架はいっぱいには埋めず、隙間から隣の書架の本が見えるようにしてある。そして都城家具工業会が製作した楠や杉を使った美しい木製家具が木の香りを放ち、パヴィリオンのように点在している。中でも800個の木箱型書架が、ホール周囲やかつてのモール「ストリート」に面した「店先」にリズムカルに配置される。展示しているのは、そのエリアにどんな本があるのかを例示するための本や、市内施設に向いて「御用聞き」をし、コラボして選んだ本や情報などだ。歩くだけで《何か》に出会える。



写真16 1F ストリート(左)と2F リビングのような席

館内にはいろいろな種類の椅子を点在させた。静かな部屋、おだやかな席、リビングのような席など静かさや開放度などが違う居場所を、好みや気分で選ぶことができる。

「こどものにわ」はお話し会でも使うが、普段は多少こどもが騒いでも大丈夫な場所として開放している。紙コップで積み木遊びもできる。場づくりチームが開くイベントで、さまざまな形のスタンプを紙に押しつけて遊びながら印刷原理も知り、サインペンのインクを水に溶かして色水をつくって色の微妙な違いを感じる。感性を育む活動『こどものにわ』を東京と福島で続けている榊田拓哉さんとのコラボで実現した。



写真17 こどものにわ

ティーンズスタジオは、武蔵野プレイスのような居場所に加え、“本格的な活動の場”として、「ファッションブランドデザインが生み出されていく研究工房」という設定でFashion Lab.をつかった。世界的研究では、大人が行うような本物の活動が子どもを成長させると言われている。手作業を活かした染めやプリントを施した服作りをおこなうファッションブランド《spoken words project》に全面協力頂いた。



写真18 ティーンズスタジオの奥にある Fashion Lab.

これまで図書館は「知る」を支えてきた。しかし表現したものがなければ、知ることはできない。都城市立図書館では、地域のことを取材し、資料として表現していく場として、図書館の入り口に入ってすぐの場所に「プレススタジオ」をつかった。編集者、ライター、デザイナーなどのスタッフが、地域の資産になるような記憶や情報の編集を行い、「展示台」や「地図黒板」

「プレビュースタジオ」で共有していく。また、五十音順に言葉が並ぶ「インデックス」。その2次元バーコードをタブレット端末「大事なもののメモリー」やスマホで読み込むと関連する本、書架番号を表示する仕組みも用意した。



写真19 カフェショップからプレススタジオを望む

都城市立図書館のコンセプトは「ひとりひとりが『だいじなもの』をみつけていくために」。個人の『だいじなもの』が集まって地域はできていく。来館者数をもって図書館の評価をすべきではないが、みんなに開かれている「公共性」を計る参考にはなる。開館して9ヶ月半で来館者は100万人となった。それだけの人がまちに戻り、居場所となっている。《何か》に出会い、見つけていくための場。それが「まちには必要なもの」なのかもしれない。

ホールの「ショーケース」に展示しておく見計らい本（購入前の見本の本）の読みたいものに葉を挟んで頂き、選書の参考にする。市民みんなでこの場をつくりたいという思いの象徴だ。

図書館の遺伝子をもった地域自治の拠点となるにはまだまだ時間がかかるだろう。しかし、その素地、土壌はできたかもしれない。タネがこぼれおち、やがて芽を出すにちがいない。生産地を守り継ぎ、人びとが生きていくための図書館、MALL (Miyakononojo Augmented Library for Livingの略)。「生きがい・広がる・図書館」。